

『省心雜言』と善人

——宋代士大夫における日常道德の担い手——

緒 方 賢 一

宋代の一般的士大夫が日常という位相においていかなる倫理思想を展開したかという問題を、ここ数年研究している^①。要約すれば以下になる。「理」などの絶対的価値ではなく、「俗」「人情」という相対的価値観の支配する世界に住まう「普通人」は、「利」に導かれてようやく「善行」へと赴く。

本稿では李邦献の著した家訓『省心雜言』をもとに、日常において倫理的たるべき、倫理的たらんとする主体はいかなる形を取りうるかに焦点を当てて考察を行ってみたい。

一 李邦献と『省心雜言』について

まずは作者の李邦献とその書『省心雜言（以下『省心』）』について見ておきたいのだが、実は李邦献についてはさほど史料が残っていない。『省心』の他には、詩詞が数篇と官職に関する断片的記述が地方志や『宋詩紀事』、『宋会要』などに残っているに過ぎない。次に引く『全宋詞』の伝は様々な史料を総合して作られたと思われる。

邦献字士举，河陽（今河南省孟県）人。李邦彦之弟。宣和七年（一一二五）直秘閣，管勾万寿觀。紹興三年（一一三三）夔州路安撫司幹辦公事。五年（一一三五）特追職名。二十六年（一一五六）荆湖南路轉運判官。又直秘閣，兩浙西路轉運判官。乾道二年（一一六六）夔州路提点刑獄。六年（一一七〇）興元路提点刑獄。『全宋詞』卷二

李邦献には「浪子宰相」と評された兄邦彦がおり、その『宋史』に記された伝から、父の浦は裕福な銀工（銀細工の工房主か）であったことが確認で

③
きる。

李邦彦字士美，懷州人。父浦，銀工也。邦彦喜從進士游，河東拳人入京者，必道懷訪邦彦。有所營置，浦亦罷工与為之。且復資給其行，由是邦彦声誉奕奕。入補太學生，大觀二年（一一〇八）上舍及第，授秘書省校書郎，試符寶郎。……邦彦善仕中人，爭薦譽之，累遷中書舍人，翰林學士承旨。宣和三年（一一二一）拜尚書右丞，五年（一一二三）轉左丞。

『宋史』卷三五二

書物としての『省心』の成立については、弟子の馬藻が『省心』跋文中において、邦猷が子孫に対して著した家訓を自分が刊行したことを述べている。

藻嘗謂，踐履之學，見于日用。其本在于正心誠意。其効，小用之以齊家，大用之以治國。是乃聖賢相授之心法也。河内李公太中先生著『省心雜言』一編，以貽訓子孫。始終不離乎孝弟忠信仁義道德之說。踐履至到，發而為言，簡而有法，与『大學篇』相表裏。先生不以藻為愚，暇日出所藏，以相付授。……是書也，實聖賢心法所寓，如老子之言道德。聖人將有取焉。乃刊而集之，以公其伝。吁今之學者，文有余而實不足，涸源蹙本。能踐其言者鮮矣。微此書，何以見聖賢之心法也。夫門生右奉議郎樞通判興元軍府主管學事兼管內勸農事賜緋魚袋馬藻跋 馬藻『省心』跋

『省心』は馬藻によって出版された後、邦猷の孫である岐剛の幼少の頃には、既に多くの序跋が付けられ池陽や新安などで刊行されるまでになっている。更に岐剛が都へ赴任した際には林逋^④の名を付して市場で売られていたという。

先大父敷文平居自号『省心雜言』一編，皆箴規訓戒之辭。岐剛兒童之時，尚及見其手稿板行于蜀。名公鉅卿書其前後者不一。士大夫愛重之，以其本刊于池陽于新安。皆以為大父之文也。嘉定戊辰（一二〇八）岐剛調官都城，見書坊有刊，小本鬻于市，以為林和靖之作。……岐剛通守邵陽，敬以旧本模写。……嘉定壬申（一二一二）仲秋孫奉議郎通判邵州軍州事兼管內勸農營田事賜緋魚袋樞州事岐剛拜手謹識。

また明初の宋濂（一三一〇—一八一）は「題省心雜言後」において、世の学者たちが『省心』は林逋ではなく尹焞^⑤の作であるとしているのを否定し、『朱子語録続類』の「『省心録』乃沈道原之作，非林和靖也」という記述を引き、沈道原が正しいと述べている。明代にはもう著者が特定できない状態になっていたのであろう。『四庫全書総目』では、林逋・尹焞・沈道原作者説も紹介しつつ、序跋の記述により最終的には李邦献を著者であると断定する^⑥。

曾孫である李景初の跋文によれば、『省心』が書かれたのは邦献が八〇歳を越えた頃とのことである^⑦。

以上の記述からは、『省心』が刊行後広く流通し、各地で出版され、さらには別名で刊行されるまでになっていることがわかる。特に林逋が著者の名を付されて販売されていたという説からは、李邦献が当時無名であったため本屋が有名人の名を冠して売ったのではないかとの推測ができる。それはまた『省心』の内容自体は当時の士大夫らに共感を持って受け入れられるものであったことを物語っている。これはたとえ『省心』が李邦献によって書かれてはいても、『省心』という書物の持つ思想を必ずしも著者である李邦献に帰属させる必要がないことを意味しよう。子孫らがどう主張しようと、後の士大夫らが受け入れたのは「李邦献」の思想ではなく、『省心』の思想なのである。

また永楽大典本には、汪応辰（一一一八—一七六）・王大宝（一〇九四—一一七〇）^⑧の序文が付いている。汪応辰は朱熹や呂祖謙・張栻らと交遊があり、王大宝は張栻とともに講学しており、ともに道学に近い位置にいた人物である。王大宝はその序文の中で『中庸』に引かれる『尚書』の文を引用し（「人心惟危，道心惟微。惟精惟一，允執厥中」）『省心』を高く評価する。先の馬藻による跋文は冒頭に「其本在于正心誠意」と『大学』を引きながら、『省心』を「踐履之学」、つまり『大学』の実践篇であると位置づけている。ここから、『省心』の内容を同時代人が宋学の思想運動との関連で捉えようとしていたことが確認できる。

ここでとりあえず『省心』の持つ特徴を祖述しておきたい。まず形式の特徴であるが、全て簡条書きで、短いものは八字、長いものでは一四三字、全

二二八条からなる。全体の構成に特に工夫はうかがえず、それぞれの箇条に前後の脈絡はつけられていない。内容面では、普通の家訓が「家の秩序」

「自己の修養」「立身」「家産の管理」「交遊について」「世相について」「遺言」など様々な事柄をそれぞれ比重を変えつつ記述しているのに対し、『省心』はその内の「自己の修養」についての記述が圧倒的に多い。時に君子たるものの心得などが説かれるもののそこに重点は置かれていない。また祖先や一族への言及が全く見えないこともその特徴の一つである。祖先への言及のなさは、あるいは父が裕福とはいえ「銀工」であったこと、つまり士大夫ではなかったことに起因するのではと考えられる。また一族への言及に関しては、兄の邦彦の存在が問題となる。徽宗朝時に宰相であった邦彦の評判の悪さはすさまじいものがあつたようで、退朝時には群衆が指さして罵り殴打しようとしたほどであつたといふ^⑨。一族に言及しようとすれば邦彦に触れざるを得ず、よって最初から家族について言及しないという配慮がなされたのではないだろうか。

二 「善人」について

『省心』最大の特徴は「善」への指向を語る語の多いことにある。その数は全二二八条中、二九条を数えることができる。例えば「為善不如捨悪。救過不如省非」(第二一条)、「勉強為善、勝于因循為悪」(第二四条)、「為善者不云利、逐利者不見善」(第五一条)、「人皆有好生惡死之心、人皆有捨生取死之道、何也。見善不明耳」(第五五条)など。『省心』においては道德行為はほとんどこの「善」の語によって表象されている。そこで『省心』の中で求められている理想的人格を「善人」と呼んでおきたい。

二一 「善人」になる人々

中国において人間をその内面的特徴において分類する場合、「君子—小人」、あるいは「聖人・賢人—衆人」などのカテゴリーが通常用いられるのであるが、本稿では従来あまり重視されてこなかったもう一つのカテゴリーである「善人—悪人」あるいは「善人—不善人」の観念を、日常倫理という位相における道德的人格を示す語として導入することにする。この「善人」という言葉を用いることで、宋代人の日常生活において漠然と想起されていた、理想的人間像を明確にすることができる。

では日常という地平において「善人」になるべき人間とは一体誰なのか。それは家訓の教化の対象である「普通人」である。「普通人」たちは品行方正な君子を補助せず、徒党を組んで私欲を肥やす小人に従う。つまり思慮浅く表面的な飾りに惑わされやすく、事の本質を自分ではなかなか判断できないような人間を言う^⑪。そのような「普通人」にとって現実は多様に変化する世界となって顕現する。

先輩論医云、閉門看古方三年、知天下無病不可治。及其出而用藥療疾、知古今無方可用。此無他聞見、力極則止、至于応変則無有窮尽。噫豈但論医也。士之學問、其失正在是。苟以是心反之、孳孳旦夜自不知為余。縱未能尽愈天下之疾、亦庶幾乎十失二三也。 『省心』第四五条

世の中の変転は極まりなく人はその全てに対処できるわけではない。そこでは人は、十のうち七、八までいけば十分である。このような前提からは、朱子学者らのように孔孟を目指せというようなスローガンは生まれてこようもない。つまり『省心』が目指すのは究極的な善性（＝至善）ではない。「普通人」たちは聖賢にはなれない。『省心』が目標とするのは、「普通人が普通に修養して到達しうる理想的人格」である。それが「善人」なのである。

二一 「善人」を育てる

「普通人」は「善人」にどうやってなるのか。

教子弟無他術。使耳所聞者善言、目所見者善行、善根于心、則動容周旋無非善。譬如胡越同居、再世則語音變、幼則視父兄、長則視朋友。雖然善惡有種、視先世如何耳。 『省心』第五六条^⑫

「普通人」たる子弟たちを教える方法は一つしかない。耳に善言を聞かせ、目に善行を見せることだ。そうすれば善が心に根づき、あらゆる振る舞いが善になるという。儒者が道徳修養を語る場合、基本的には内面的充実をまず第一とするのに対して、この『省心』の、善を外側から詰め込んでゆくという方法^⑬はきわめて特異なものであるといえよう。

次にいかにして普通人たちに「善」を指向させるのか、その動機付けが次

に問題となる。家訓制作者らは「利」によって普通人たちを「善」へと導いた。^⑭それは『省心』も例外ではない。では『省心』において「利」はどのような形を取って表れているのか。

・「楽」

『省心』において善行を尽くして後に到来する「利」は二種類に大別できる。その一つは「安楽」「逸楽」などに代表される「楽」である。「楽」は「たのしい」「らく」双方の意味を含む。

知足則楽、務貪則憂。『省心』第十二条

知足者貧賤亦楽、不知足者富貴亦憂。『省心』第八七条

「足るを知る」というのは「分に安んじる」と同様、現在の境遇に充実感を見出そうという、日常道徳における重要な徳目の一つである。ここでは「足るを知」ればそこには「楽」があり、そうしないと「憂」であると述べられている。「善行」すれば「楽」であり、「不善行＝悪行」すれば「憂」なのである。『省心』はこの「楽・憂」の語を、人生の価値を判断する基準として多用する。^⑮しかし「善行」すればただちに「楽」,「悪行」すればただちに「憂」^⑯なのではない。「楽・憂」はあくまで結果としてもたらされるものである。「楽」な道程は、怠慢に繋がり結果として死に至るのであり、「憂」であれば恐れ慎む故それは養生の本となるのである。「善」であれば結果としての「楽」に至りつけるが、「楽」な道のりは結果として「死」に至ることになる。修養の過程ではあくまで「労苦」^⑰すべきなのであり「楽」は「憂」を経た後にはじめて得られる。つまり「善行」自体は決して「楽」なものではなく、「労苦」をとまなうものなのである。

だからこそ「労苦」して「善行」を積み、最後には「楽」が訪れると説くことで人々を道徳修養へと導き入れるのである。^⑱

・天報

もう一つの「利」は天が下す報償である。『省心』では善行・悪行に対する天の反応があからさまに語られており、その応報に対する信頼は非常に厚

いものがある²⁰⁾。

天から報償してもらうには、朝起きてから夜寝るまでずっと気を抜くことなく忠孝であらねばならない。天は四六時中見ているからだ。天は自重しない者、畏れ慎まない者には災禍を、現在の自分に満足せず精進する者には吉をもたらす²¹⁾。しかし現実には善行に天が必ず福をもって報いてくれるわけではない。それに対し『省心』は次のように語る。

善惡報緩者非天網疎。是欲成君子而滅小人也。『省心』第三七条

葉夢得の場合、善行とそれに対する天の応報との不一致はあくまで偶然であるとされていたが、『省心』において、それは「君子を育成し小人を滅ぼす」ためであるという。善行に対して天報がただちになれば、君子はより精進するであろうし、小人であればすぐに怠けて墮落する。ここでは天報の疎漏を天の意志として積極的に、より好意的に解釈する態度が見られる。善行と天との感応関係に対する無条件の信頼と、時に生じる不均衡をさらなる道德修養へと繋げていくこの論法は、宗教的とすら言える性格を持つ。しかし基本的に善惡の応報は速やかなものである。なぜなら応報が疎かったならば、人性は中・下に流れていってしまうからである²²⁾。普通人たちの心性はややもすると怠惰に流れがちであり、その心をつなぎ止めるには速やかな反応が常に求められるのである。ここで次にこの人性の維持ということについて考えてみたい。

二一三 善性の維持

さて「楽」や天報という「利」を目の前にぶら下げられ、善言を聞かせ善行を見せるなどして善性をその内側に詰め込まれた普通人は一体どのような状態にあるのか。

人之制性，当如堤防之制水。朝培暮植，猶恐蟻漏之易壞。若汎濫不固，一傾而不可覆也。『省心』第一〇六条

人が自らの内にある「性」を取り扱うのは、堤防に遮られ貯まっている水を制御するようなものであるという。朝から晩まで四六時中漏洩の有無を点

検せねばならない。なにしろこの善性は小さな穴からでも漏れ出ていき、そして一旦溢れ出したらもう元には戻せないからだ。『省心』において、漏れ出すというのは「不善を行うこと（人性如水。為不善如就下^②）」である。『省心』で語られる「性」は、例えば程頤や朱熹ら道学者の解釈する「性」とは明らかに異なっている。道学においては、「性」は「理」と結びついて人間性を決定づける普遍的・根源的性格を持つものであるが、『省心』に見られる「性」に関する言説はほとんどと言ってよいほど下へ流れていこうとする水の比喻によって構成されている。またこのような「性」の捉え方は、性善説か性悪説か（または性無善悪説か）といった、宋代に再燃した「性」の属性に関する議論からも遠い位置にある。『省心』の「性」はこの従来の性説の範疇に回収しえない。それは本性といったような人間存在を規定するような働きを持っていない。見聞きすることによって内に根付き蓄えられ、油断すると外に流れ出てしまうもの。それは今の言葉なら「意識」と呼ぶのではないか。そうであるとしたら「善性」とは「善の意識」あるいは「善を保とうとする意識」といえるであろう。

人性如水。水一傾則不可復。性一縦則不可反。制水者必以堤防，制性必以礼法。
『省心』第一九八条

人性如水。曲直方円，随所寓善惡邪正。随所習富貴声色。皆就下，不勞習者。人若非見善明用心剛，強忍力行，則決堤壞防，不流蕩者幾希。
『省心』第一六〇条

不定形で善悪邪正いかようにも傾斜しうる人性（＝「意識」）は、自らの内側においてそれを善の領域に保とうと努めるだけでなく、礼という「善な形式」に沿って行動することで善の外にはみ出すことを免れるのである。

三 善人たちの世界

様々な訓致と修養を経て普通人たちはようやく善人となった。彼らは「俗」や「人情」などの、時と場所によってその姿を変え、長期の不動性を持ち得ない文化的構築物を普遍的価値観の基盤と見なしていたが、そのような「土地」にいかにして倫理的世界をうち立てるのか。

事君如事父。以実不以文，以誠不以巧。尊而畏之，愛而敬之。尊則不敢欺，畏則不敢侮。愛則不忍隱，敬則不忍犯。 『省心』第二一二条

父君に仕えるには「誠・実」をもってすべきであるという。

父慈子孝，兄友弟恭，相須之理也。然子不可待父慈而後孝，弟不可待兄友而後恭。譬猶責人以信，然後報之以誠。 『省心』第六二条

ここにも「誠」の字が確認できる（「信」も「まこと」を意味しよう）。善人の世界においては、「誠」によって人と人とは結びつく。「誠」を介して人は倫理的関係を形成するのである。例えば朱子学的な理解では、人と人とは四端から仁義礼智、そして最終的には「内在／超越」的性格を持つ「理」によって媒介され整然たる秩序のなかに組み込まれる。また『中庸』や『易』などを引いて朱子学で展開される「誠」は、「真実無妄」であるとか「天の道」といった非常に観念的な捉え方をされる。しかしここに見られるような善人の「誠」とは「誠意」、つまり「まごころ」のことである。この「まごころ＝誠」は、「理」のように、あらゆる存在の奥深くに普遍的に備わっているわけでも、超越者として万物の上に君臨している絶対的原理でもない。それは単なる「善意」であり、「善の方に傾いた気持ち」である。

自信者人亦信之，胡越猶兄弟。自疑者人亦疑之，身外皆敵国。

『省心』第三三条

「自ら信ずる」とは「自らをまことと思う」と解してよいであろう。「誠」をもって対すれば、相手も「誠」をもって応じてくれる。それは打てば響くような呼応の関係にある。あるいは感応（25）の関係にある。この「誠」は人と人の間に通ずる「こころ」の中にあるのであり、それを越えたどこか抽象的な空間に浮かんでいるわけではない。「誠」が本当に通ずるかどうかに関して『省心』は疑いを持たない。よって「理」を説く必要が生じないのである。この「誠」はまた人と人の間のみに存するわけではない。

漁獵不同風，舟車不並容。飲食嗜好，礼儀貪殘，四夷与中国，殊絶若

永炭。至于推誠則不欺，守信則不疑。六合之内可行。動天地，感鬼神，
非誠信不可。 『省心』第三四条

風俗の違いを越え、礼的秩序を越えて、つまり中華文化の境界を越えて、
夷狄との心的結合を可能にし、さらに天地を動かし鬼神を感応させうるのは
「誠信にあらざれば不可」なのである。

蛮夷不可以力勝而可以信服。鬼神不可以情通而可以誠多達。況涉世与
人為徒，誠信其可捨諸。 『省心』第九二条

蛮夷は「信」をもってしか服従させることはできず、鬼神には「誠」によ
ってしか到達できない。そして人と人とは「誠信」による以外に結びつくこ
とはできない。こうして「誠」は人と人，人と夷狄，人と天地，そして人と
鬼神とを結びつける媒体となる。

『省心』とは、このような「善人」たちの世界の実現に向けて、「善言」
をあくまでわかりやすい口調で愚直なまでに繰り返し語り続ける書物なので
ある。

〔付言〕以上の内容は、大谷大学での特別研修員発表会や宋代史談話会での
口頭発表にもとづいて執筆されたものである。紙数の制約上、道学の
善人観や道教の勸善書との比較を割愛せざるをえなかった。稿を改めて
論じることにはしたい。

註

- ① 緒方賢一「Introductions for Posterity : the Reconstruction of Kinship」『The Study of Song History from the Perspective of Historical Materials』The Research Group of Historical Materials in Song China [二〇〇〇]，「家訓に見る宋代士人の日常倫理」『宋代史研究会研究報告第七集 宋代人の認識 一相互性と日常空間一』汲古書院 [二〇〇一 a]，「葉夢得の『善行』 一家訓を導きとして一」大阪市大中国学会『中国学志』豫号 [二〇〇一 b]
- ② 出身地が『全宋詞』では「河陽」とあるが、『四庫全書総目』は「懷州人」とし、『宋史』の兄邦彦も「懷州人」である。河陽と懷州との距離は約二十五キロほどであり、その違いにあまり問題はないと考える。

- ③ また『省心雜言』の項安世による跋文(一二〇四年作)には「李公生于太平之世富貴之家，老于南遷之後」という記述も見られる。ちなみに序跋などから李家の系譜をたどると，李浦—李邦猷—李□□(不明)—李岐剛—李景初となる。
- ④ 林逋(九六七—一〇二八)，錢塘人。字君復。諡和靖先生。
- ⑤ 尹焞(一〇七一—一一四二)，洛陽人。字彥明。号和靖处士。
- ⑥ 『四庫全書總目』卷九二，子部儒家類二「省心雜言 永樂大典本」。
- ⑦ 「景初四世祖提刑敷文乃丞相文和公之介弟。生長太平中更憂患。稟賦厚而神氣正，識見遠而界限明。抱負偉而發舒奇，經涉多而酬應定。人不知其為貴人也。是以仕建紹間，歷事三朝。……年踰耳順，力上掛冠之請。人以比漢二疏優遊林下。壽踰八秩，人以比洛中諸老。晚年書所見于坐右，凡數十條，以訓子孫。名曰『省心雜言』。明白洞達，沈著痛快。雜之語錄中莫弁。刊行已久，景初王父通守古邵，亦嘗鈐梓」(『省心』李景初跋)。
- ⑧ 『四庫全書總目』に「王大実」とあるのは誤り。
- ⑨ 「金人既薄都城，李綱・种師道罷，邦彦堅主割地之議。太學生陳東數百人伏宣德門上書，言邦彦及白時中・張邦昌・趙野・王考迪・蔡懋・李稅之徒為社稷之賊，請斥之。邦彦退朝，群指而大詬，且欲毆之，邦彦疾驅得免。」『宋史』卷三五二
- ⑩ 一応「善」に言及している条数を挙げておきたい。四条・七条・二一条・二四条・三五条・三七条・五一条・五五条・五六条・六七条・七八条・八一条・九四条・一〇二条・一〇三条・一〇四条・一〇五条・一〇九条・一一三条・一二七条・一三二条・一三四条・一三九条・一四一条・一四六条・一六〇条・一六九条・一七七条・一八六条。
- ⑪ 「君子独立而持正，故助之者鮮。小人挾党以濟私，故從之者多」(『省心』第一二一条)。また「憂天下国家者，其慮深，其志大，其利博。其言似迂，其合亦寡，其遇亦難。吾孔孟是也」(『省心』第一二三条)。
- ⑫ この善言を聞かせ善行を見せるという方法は，その意図するところは異なるものの『孟子』の次の文に基づいたものであろう。「孟子曰，舜之居深山之中，与木石居，与鹿豕遊，其所以異於深山之野人者幾希。及其聞一善言，見一善行，若決江河，沛然莫之能禦也。」『孟子』尽心上
- ⑬ もっとも自己というのがまったく空っぽのものだと言っているわけではない。「良知」はもともとちゃんと内に備わっている。ただそれが忘れられがちなのだというのである。「事親孝者，事君必忠，何以知之。良知固存。雖妻子不能移其愛。推此以尽為臣之道，則爵祿安能易其守。子惟知有親，焉得不孝。臣惟知有君，安得不忠。所以良知者，其可忘乎」(『省心』第六一条)。
- ⑭ 注1 [二〇〇一 a] 参照
- ⑮ 例えば「内睦者家道昌，外睦者人事濟」(第十五条)，広積聚者遺子孫以禍害，多声色者残性命以斤斧」(第三一条)。そして葉夢得同様，純粹に「利」のためだけの「善行」も否定する。「為善者不云利，逐利者不見善。舜跖之徒，自此分。

捨生取義，固不可得。見利思義，聖人亦取之。殆哉，不可言。況可為乎。孟子答梁惠王之言至矣。」(第五一条)

- ⑮ 他にも「欲常服者不爭，欲常樂者自足」(第九九条)，「張飽帆于大江，驟駿馬于平陸，天下之至快，反思則憂。処不爭之地，乘獨後之馬，人或我嗤，樂莫大焉」(第一〇一条)などが挙げられる。
- ⑯ 次の文を参照されたい「行坦途者肆而忽，故疾走則蹶。行險途者畏而謹，故徐歩則不跌。然後知安樂有致死之道。憂患為養生之本，可不省諸」(『省心』第二九条)。
- ⑰ 「心可逸，形不可不勞。道可樂，身不可不憂。形不勞則怠惰易弊。身不憂則荒淫不止。故逸生于勞而嘗休，樂生于憂而無厭。是逸樂也。憂勞其可忘乎」(『省心』第六六条)。「少不勤苦，老必艱辛。少不服勞，老不安逸」(『省心』第一七八章)。
- ⑱ もちろん「富貴」という「樂」の境遇そのものは「惡」ではない。「富貴以道得，伊尹是也。貧賤以道守，顏淵是也。俱為聖為賢。負鼎于湯与箪瓢陋巷，勞逸憂樂，不可同日而語也」(『省心』第一一四条)。
- ⑲ 「為善則善応，為惡則惡報。成名滅身，惟自取之」(『省心』第九四条)。「禍福者天地所以愛人也。如雷雨雪霜皆欲生成万物。故君子恐懼而畏，小人僥倖而忽。畏其禍則福生，忽其福則禍至」(『省心』第三八条)。
- ⑳ 「夙興夜寢，無非忠孝者，人不知，天必知之。飽食煖衣，恬然自衛者，身雖安，其如子孫何」(『省心』第八八条)。「不自重者取辱，不自畏者招禍，不自滿者受益，不自是者博聞，吉凶悔吝自天，然無有不由己者」(『省心』第四七条)。
- ㉑ 注1〔二〇〇一 b〕参照
- ㉒ 「善惡之報速則人畏而為善。天網雖勿漏，恐太疎則流中下之性」(『省心』第一七七条)。
- ㉓ 『省心』第一〇五条。
- ㉔ 注1〔二〇〇一 a〕参照
- ㉕ 同様の論理は「誠」以外の倫理的觀念にも適應される。「孝于親則子孝。欽于人則衆欽」(『省心』第十九条)